

毎日歌壇

米川千嘉子 選

投光器に浮かぶ救援の人々の厳しさやさしさに祈りぬ

天に祈りぬ 朝倉市 山下 愛

△評▽投光器が能登半島地震の被災地の夜を照らす。不眠不休で続く救援活動。祈る心情を詠む歌が多く寄せられている。

何故に嗚咽する時丁寧語七十路今も「ですます」でする 幸手市 中村 早苗

△評▽夫婦げんかにもそれぞれの家の流儀があるのかも。生真面目さがユーモラス。プロジェクト戦争終結社運を懸く 株式会社地球の社員 千曲市 中村 美樹

空襲の東京みたい独りごつ輪島の瓦礫に立つ女の声 京丹後市 山副美佐子

非正規の息子の愚痴を聞く我ら言葉につまり耳を持つのみ 掛川市 宮川 正夫

目と鼻を描かれた絵本の木になって君は静かに語りはじめる 碧南市 江原 冬莉

林道にぬひぐるみかと訝れば子熊すわりて毬栗いちろ 盛岡市 福田 栄紀

あの屋根の耐える重さはどれ程かビニール傘に降り積もる雪 南魚沼市 木村 圭

老人へ座席を譲った老人に感動して夜スクワットする 静岡市 柴田 和彦

ガラス越しにて泣いている乳呑み児よあやしいけど吾は感染 須崎市 野中 泰佑

加藤 治郎 選

鈴カステラに鈴の音を足していく部門の責任者の席が空く

帯広市 小里 京子

△評▽詩的なイメージが広がる。鈴の音を足すとは楽しい作業である。重話のようだ。責任者の不在は異変の始まりだろうか。

重要な仕事だとだけ聞かされて連絡途絶え前日となる 大津市 佐々木敦史

△評▽依頼人に何かあったのか。重要な仕事があつて浮いている。不穏な事態である。コーヒーの落ちゆく音のポコポコに打たれてわれはよいボクサー 垂水市 岩元 秀人

ひらがなであつてほしいと思つたクリームコロッケのかにの部分 横須賀市 森久保りりか

そう言つて彼はゆっくり腰をあげわたしの明日を永遠に去る 所沢市 神田 望

雨の名をやたらと知っている友はただの天気予報を詩のように呼ぶ 大津市 世田 夏雪

信号の青はみどりであなたとは赤の他人で世界はグレー 東京 石川 真琴

昨年は秋がなかったらだたらと冬まで夏を続けやがった 枚方市 久保 哲也

羽根ペンのゆれる倉庫でいっせいに過去になるわたしの子守唄 花巻市 永汐 れい

あさぼらけぼらがどこかに住んでいるさけもどこかに落ちている朝 静岡市 海瀬安紀子

水原 紫苑 選

9時から夜と名付けた者たちに夜の暗さは見失われて

豊橋市 太田 貴大

△評▽夜の暗さを本当に知っている者には、あるいは夜は別の何かなのだろうか。その名を知りたい。

ダウンから羽根はこぼれて着ぶくれの人は天使の遺伝子を持つ 東京 石川 真琴

△評▽豊かな想像力と見事なりアリティの一首。冬は天使が多い。起き抜けに朝に向かって好きだよと咬くほどに君が好き 高島市 明 薫

北を向く信号はみなひび割れて町を逃げ出す気は起こらない 浜松市 尾内甲太郎

首かしげドアーミラーのヒヨドリは哲学的なギリシヤの貌に 水戸市 大野太加し

石庭は雨を冷やして明け鐘が細く ござるちゅうる おんる つくば市 そのべせい

基督を知らぬ賢朝「身に積もる罪」と歌うは如何なる罪か 横浜市 中村 秀夫

ジェット機の「墮落」と読みちがいを春のうつつと夢の谷間で 平塚市 北原 直人

冷えきったカップの底の落日が最後のことはを灯しはじめる 札幌市 鈴木 精良

雪に降り籠められるならその時はわたしに冬の声を聞かせて 東京 音羽 凜

伊藤 一彦 選

青年は走る治道は応援す我らは年寄り初仕事して

安城市 杉浦 陽子

△評▽上の句は新春の箱根駅伝か。「初仕事」を歌う下の句は自負の心がさわやかに伝わる。夫婦で梨栽培に励んでいるという。

冬の夜に石牟礼道子ゆっくと繰り返して読む若き日の吾と 一関市 相川 元美

△評▽石牟礼作品をかつて読んで今また読む作者。結句「若き日の吾と」に深い余韻。「プーチンは疲れないのかプーチンに」八十億人の待ちある平和 成田市 神部 一成

一年はこんなに長い 戦争を毎日意識しているだけで 札幌市 住吉和歌子

剣太刀身にそわめこの現今に原爆が身にそうことなけれ 沼田市 山崎 杜人

温もれる人の中へと帰る来てふるさくに尽きし命かなしき 東京 福島 隆史

政界はことばの命奪ふ場所「責任」「丁寧」「重く」「寄り添ふ」 神戸市 中林 照明

英会話の相手は飽きず愛想よく返答くれるアプリのA-I 大阪市 タカエレイコ

焼き肉会行かない理由はめんどくさい説明さえも面倒なので 鹿児島市 松嶋ふつた

三十年給与上がらぬこの国でパブル期超える株価となりぬ 吉野川市 喜島 成幸

投稿規定 はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051 (住所不要) 毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生 (希望選者名) 係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます